るのである．これも現地を確かめれば独立種として扱うべきものであることは明瞭である．こうした点でよくできているのは，いがりまさし氏の「日本のスミレ」(1996，山と渓谷社）である．現地の克明な調査の上で書かれているのでいろいろ参考になる．ただ学名の選択にはかなり遠慮が見られ，氏自身の意見があまり述べられていないのはもの足りない．

(165-[redacted] 東京都中野区[redacted])

北海道のイブキスミレ（五十嵐　博[a]・高橋　誼[b]・三浦忠雄[c]）

Hiroshi IGARASHI[a], Yoshimi TAKAHASHI[b] and Tadao MIURA[c]: *Viola mirabilis* L. var. *subglabra* Ledeb., New to the Flora of Hokkaido, Japan

イブキスミレ *Viola mirabilis* L. var. *subglabra* Ledeb. は一般に側弁が有毛と記載されており（井波 1966，橋本 1967，浜 1975，1987，籾山 1982，いがり 1996, Akiyama & al. 1999）日本では本州に分布し，青森県北部が北限とされてきた．一方，高橋は北海道にもイブキスミレに相当するものがあることに気づいていたが，側弁向軸面が無毛なことから「イブキスミレ？］と報告しておいた（高橋1967）．

この北海道産「イブキスミレ？］について五十嵐は，高橋からの情報にもとづき，1999年5月16日に日高支庁沙流郡門別町平賀の「ひだまりの里」標高60 m 内外のコナラ林において調査を行い，側弁の毛以外の点ではイブキスミレとよく似ていることを確認した．

生育環境はコナラが優占する二次林で，コゴメウツギ，カタクリなどともに群落として広範囲に生育しており，本州の生育状況に近い印象である．本種は石灰岩植物（井波 1966，籾山 1982，いがり 1996，田渕 1996）として報告されているが，火山灰地にも生える（橋本 1967，いがり1996）との記載もみられ，現地は火山灰地である．

2000年の再調査では平賀周辺の山野でも高橋により新たに産地が確認された．三浦は高橋の指摘により，静内町霊園付近のカシワ林，静内町真歌公園の雑木林斜面の2箇所で本種を確認した．五十嵐が両氏の情報に基づき，門別町平賀2箇所と静内町2箇所を調査した結果，門別町の個体群は全ての個体で側弁が無毛であり，静内町の個体群は全ての個体で側弁が有毛という点で違いが見られた．門別町と静内町の2町の間には新冠町があり，各地を調査したが新冠町では現時点では見つかっていない．4産地の植生は若干の差はあるがほぼ同様の環境であり，ひだまりの里以外では数 m の範囲で1箇所に群落が集中していることが確認された．

イブキスミレは欧州などに産する *Viola mirabilis* L. に似て茎に二列毛のない変種であり，大賀（1930）によれば「明治14年牧野博士東京より帰郷の際伊吹山に採集し，同17年大学に携へ行かれしに松村博士これにいぶきすみれの和名を附け而して其学名を鉤出されたるものなり．茎の基部に特殊の形なせる鱗片あり，又有茎にして茎上に閉鎖果をつけたる形は蓋し特徴とすべきものなり」，橋本（1967），いがり（1996）では「花期は無茎，花のあとは茎をのばすので，学名に不思議なという意味の mirabilis がついた．」の記載も見られる．側弁の毛の有無について，Ledebour（1842）や別変種が報告されている Maximowicz（1859）などの各種文献を検討したが記載されていなかった．大賀（1930），Wang（1991）などでは多くの変種が報告されているが側弁有毛のものばかりである．また，大賀（1930）やいがり（1996）では伸びてきた（地上）茎に閉鎖花がつくことを特徴としているが，北海道産では地上茎が伸びた後も通常花が開花することが確認されている．これらの違いから，今回の門別町産の植物を変種として報告することも検討した．しかし，スミレ属では側弁の毛の有無は決定的な見分けのポイントであるものの，五十嵐・梅沢（2000）で報告したケマルバスミレ *V. keiskei*

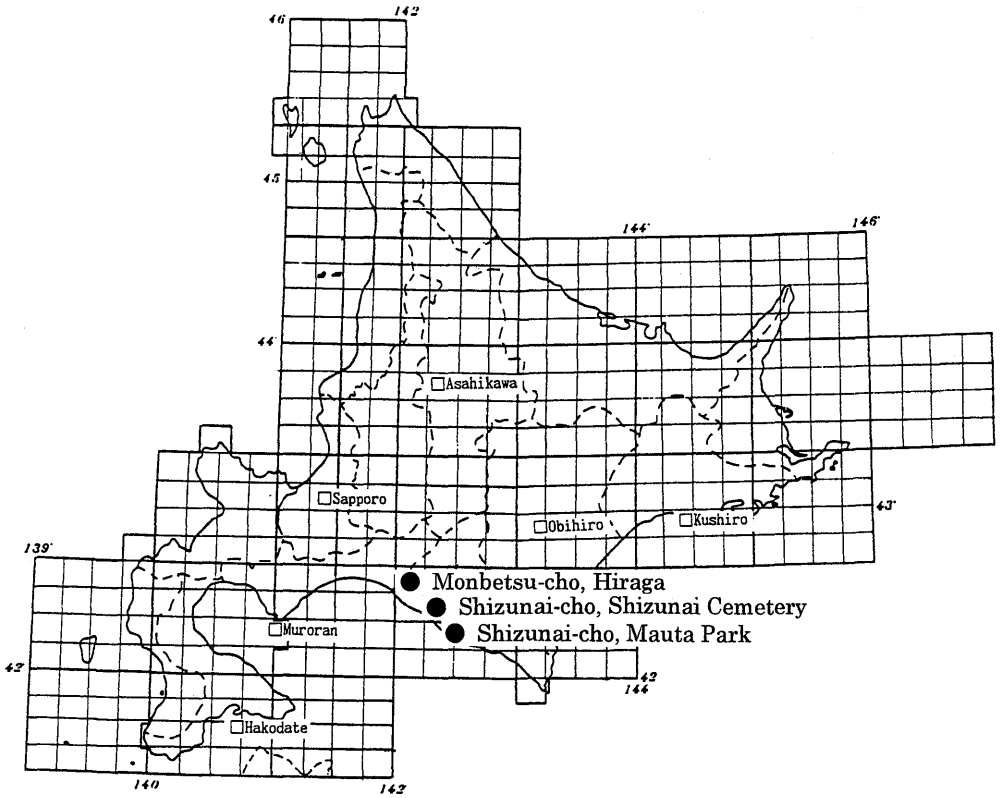

Fig. 1. Distribution of *Viola mirabilis* L. var. *subglabra* Ledeb. in Hokkaido, Japan.

Miq. の場合は側弁が無毛のものから有毛のものまであるというように種内で変異が確認されている．したがって現時点では変異の範疇として変種とはせずに北海道産のイブキスミレの特徴として報告する．証拠標本は国立科学博物館（TNS），北海道大学総合博物館（SAP）に収めた．本稿をまとめるにあたり．門田裕一博士に貴重なご助言をいただいた．また，名古屋の日本スミレ同好会・山田直毅氏と札幌の中井秀樹氏からはLedebour, Maximowiczなどの文献を見せて頂いた．ここに記して感謝の意を表する．

Viola mirabilis L. var. **subglabra** Ledeb. Fl. Ross. **1**: 251 (1842). イブキスミレ.

Viola mirabilis L. var. *vulgaris* Ledeb. Fl. Ross. **1**: 251 (1842).

Viola mirabilis L. var. *brachysepala* Maxim. Prim. Fl. Amur. 50 (1859).

Viola mirabilis L. var. *brachysepala* Regel in Bull. Soc. Nat. Mosc. **4**: 450 (1861). nom. superfl.

Viola mirabilis L. var. *subglabra* Ledeb. f. *strigosa* W.Beck. et f. *latisepala* W.Beck. in Beih. Bot. Centralbl. **34** (2): 236 (1917).

Hab: JAPAN; Hokkaido, Saru-gun, Monbetsu-cho, Hiraga alt. 60 m, 16 May 1999, H. Igarashi 99201 (TNS, SAP); Hiraga, 29 May 1999, H. Igarashi 99202 (TNS, SAP); Shizunai-gun, Shizunai-cho, Shizunai Cemetery alt. 60 m, 13 May 2000, H. Igarashi 00201 (TNS, SAP); Shizunai-cho, Mauta Park alt. 80 m, 17 June 2000, H. Igarashi 00202 (TNS, SAP).

引用文献

Akiyama S., Ohba H. and Tabuchi S. 1999. Violaceae. Flora of Japan. **IIc**: 161–190. Kodansha, Tokyo.

橋本　保 1967. 日本のスミレ. 206 pp. 誠文堂新光社, 東京.
浜　栄助 1975. 原色日本のスミレ. 280 pp. 誠文堂新光社, 東京.
——（編）1987. 写真集日本のすみれ. 188 pp. 誠文堂新光社, 東京.
五十嵐　博, 梅沢　俊 2000. ケマルバスミレ北海道に産す. 植物研究雑誌 **73**: 187–189.
いがりまさし 1996. 山渓ハンディ図鑑 6. 日本のスミレ. 247 pp. 山と渓谷社, 東京.
井波一雄 1966. 日本スミレ図譜. 187 pp 六月社, 大阪.
Ledebour C. F. von 1842. *Viola milabilis*. Flora Rossica. **1**: 250–251.
Maximowicz C. J. 1859. *Viola milabilis*. Primitiae florae Amurensis. Mem. Acad. Sci. St. Pétersb. Sav. Étrang. **9**: 49–50.
籾山泰一 1982. スミレ科. 日本の野生植物. 草本 **II**: 243–253. 平凡社, 東京.
田渕誠也 1996. すみれ図鑑. 174 pp. 栃の葉書房, 鹿沼.
大賀歌子 1930. すみれ図譜. p. 8, pl. 8. 生き物趣味の会, 東京.
高橋　誼 1967. 日高北部の植物相(2). 北陸の植物 **15**: 97–102.
王　慶瑞 1991. *Viola mirabilis* L. 中国植物志 **51**: 26–29. 科学出版社, 北京.

([a]北海道野生植物研究所
001-0013 札幌市北区北13条西 3 丁目13番地,
[b]055-[redacted] 門別町[redacted],
[c]056-[redacted] 静内町[redacted])

新　刊

□岩月善之助（編）：**日本の野生植物　コケ** 192 pl. + 355 pp. 2001. 平凡社. ¥19,500.

963 種の見事なカラー写真に加えて，線画による説明も加えて約 1700 種類という，日本産コケ植物のほとんどすべてをカバーする図鑑である．これ迄の「日本の野生植物」シリーズと構成が異なるのは，カラー写真頁が一まとめになって先頭に置かれていることと，植物体が小さいために，説明のための細部の線画が多数示されていることである．カラー写真の大部分は，伊沢正名氏が現場で専門家の指導を受けながら，三年余をかけて撮影したものという．ほとんどすべてが拡大撮影のため，大変苦労されたようだ．おかげで専門外の人間の鑑賞にも耐える，美しいコケの映像を見ることができ，あらためてコケ好きの人が増えるのではないだろうか．日本の図鑑に不可欠な和名も，本書の制作にともなって従来は学名しかなかった 100 以上もの種に新たに与えられている．これもコケ学の普及に寄与することだろう．環境問題や自然保全の意識が進む中で，植生を下支えするコケを認識理解する上で，歓迎すべき一書である．巻頭にコケ植物の見方，用語解説，巻末に学名，和名索引があるが，新和名，新学名の表示があるとよかったと思う．（金井弘夫）

□エリック・ハンセン（著）屋代通子（訳）：**ラン熱中症～愛しすぎる人たち** 292 pp. 2001. NHK 出版. ¥2,000（税別）.

本書は原題を Orchid Fever: A Horticultural Tale of Love, Lust, and Lunacy という．出版年は 2000 年で植物紀行家・冒険家 Eric Hansen が書いた．タイトルから容易に想像されるように，本書は近年ますます愛好者が増し，世界中がその熱狂的なブームに湧くランに関係する人々の生態を描いている．野生種を絶滅から救う目的で生まれたワシントン条約締結以後，資源的・園芸的価値ある植物を獲得しようとする欧米国家，巨大研究機関，個人のバトルは熾烈をきわめている．特に野生ランでは，営利目的と教育研究目的の利用には確固たる線引がなされているため，特定の学術目的以外の利用のための取引は国際的に厳しく禁止されている．それがゆえ，違法な採取，移入，密輸，取引を巡るハンターの暗躍，研究に名を借りた不正行為を働く研究者が横行し，さらにそれらの指摘・指弾，そしてスキャンダル等が後を絶たない．

本書ではこうしたランの採取，取引，研究に絡んで著者が得た情報やインタヴューによって，現実の状況が紹介され，種々の問題点が指摘されているところに，私は興味を抱いた．不幸にも日本には世界的な野生植物研究機関